「バプテスト教会の形成と教会学校」

～信徒による伝道、牧会の協働を通しての宣教と教会形成～

岡 村　正 二

9月22日、本サイトで「BFC バプテスト・フェイスコミュニティー」の代表世話人をしておられる矢野 眞実氏から、寄稿についての問い合わせがありました。私は20代の時から常盤台バプテスト教会（東京都板橋区）における「バプテスト教会の形成と教会学校の働き」に関わる機会を与えられ、同時に日本バプテスト連盟における「教会学校と教会形成の課題」に取り組む道を備えられてきましたので、矢野氏とは協働の機会に恵まれ、お交わりをいただいてきました。

おりしも、今年は第二次世界大戦敗戦後、1947 年4月3日に福岡の西南学院バプテスト教会で日本バプテスト連盟結成総会が決議され、70周年を迎える年となっています。連盟結成以来重視されてきた教会学校の働きを回顧しながら、多くの先導者、協働者、盟友に接する一つの機会となることを願って、頭首の主題のもと、私のささやかな証し、エッセイとして所感を記させていただくことにしました。

（1）学ぶのは子どもだけではない～連盟の教会学校運動

子どもの宗教的情操教育、道徳教育とみなされていた日曜学校は、戦時下も子どもを愛する信徒たちによって上記のような視点から「良い子を育てる教育」とみなされ、内実的には困難な闘いを伴いながらも続けられてきました。

戦後いち早く日曜学校は更新され、信徒運動として再興されてきましたが、宗教教育からキリスト教教育へ、また教会の教育的使命を担う教会学校へと進められてきました。

日本バプテスト連盟においては、アメリカ南部バプテスト連盟から派遣された宣教師を通して、教会学校のあり方を学びました。1947 年4月3日に西南学院バプテスト教会で日本バプテスト連盟が結成されましたが、その翌年に伝道部、教育部（部長・三善 敏夫）、社会部、出版部、婦人部、学校部が組織され、さらに1949年に「教育部」が「教会学校部」（部長・菅野 救爾）に改称され、本格的な教会学校活動が始まりました。

一つの教派に「教会学校部」を組織して、全年齢層を対象とする教会学校の形成へと踏み出したのは、諸教派の中で日本バプテスト連盟がその先駆けとなって取り組んだ出来事であったと言えましょう。

理念的にも児童中心の日曜学校運動から全年齢層を対象とする教会学校への変革をいち早く目指し、その指導者として宣教師のアルマ・グレーブスが、また西南学院教会関係者、特に尾﨑 安、藤井

泰一郎、村上 寅二氏等の信徒が教会学校の再興に取り組みました。

1948 年に、西南学院教会では上記指導者たちの協力のもと、嬰児科〜大人科、校外科（後に出張科）を含めて８科 18 クラスの日曜学校が編成され、全教会員が毎週日曜日、いずれかの科（またはクラス）で教師として奉仕するか、生徒として学ぶかを選択するように奨められました。

また、同時期に熊本バプテスト教会（現在の日本バプテスト熊本愛泉教会）では、荒瀬 昇牧師と教会員の協力によって、西南学院教会と同様に、教会教育面を統合して全年齢層にわたる教会学校の科別組織が編成され、教会の宣教活動が進められました。

同教会における科別組織はアメリカ南部バプテストの諸教会と全く同様で、年齢別に細かく分けられました。嬰児科（１〜４歳)、幼児科（５〜６歳)、初等科（7〜9 歳)、中等科（10〜13 歳)、中学科（14〜17 歳)、青年科（18〜25 歳)、成人科（26 歳以上）というように。(岡村正二「第２章 教育」『日本バプテスト連盟 50 年史』－以下『連盟 50 年史』－1997 年、91 頁以下参照）このようなラジカルな改変にはそれ相当な異論も起こったのではないかと思われます。

日本バプテスト連盟の最初の教育部長、三善 敏夫氏はこのような動向に対して、「S.S サンデー・スクールは、今までその範を多くアメリカに取っていた。良きことは大いに学ばねばならないが、わが国においてはわが国独自の方法が研究され、講ぜられねばならない。単に外国の翻訳では日本の子供たちの心をつかむことはできない。私はわが国における S. S がわが国独自の発達をなして、長期建設の原動力となるべきことを念願してやまないのである」と提言しています（参照：『連盟 50 年史』93 頁)。

（２）宣教師（日本バプテスト宣教団）との協働による「教会の形成と教会学校」

『連盟 50 年史』の「第 11 章 宣教団」では、松倉 治氏が冒頭に「しかし、神の言はつながれていない（２テモテ２：9)」と記載し（403 頁)、1940 年から 1990 年代までの宣教師（日本バプテスト宣教団）との協力に関して精細に記述しています。

特に、1945 年以前の戦前、戦時下と 1946 年以降の戦後の宣教協力に関しては大きな変動があるなか、最後の 1990 年代に言及するところで「1990 年代・・・変わらないお方のために、我々は変わる」という標題で総括されているのは印象的です。

「1941 年、大日本帝国は真珠湾軍港を攻撃し、米国との戦争を始めた。マックス・ギャロットは捕虜交換船で 1942 年８月 25 日、ニューヨークに入港した。その秋、南部バプテスト海外伝道を覚える恒例の集いで、彼は宣教師の一人としてメッセージを語るように求められた。しかし、2、３千人の聴衆の前に登壇して口を開こうとしたが、嗚咽(おえつ)のために一言も語ることが出来なかった。彼はスパイをしていたとの風評が広がっていたために、聴衆者たちの厳しい憎しみの視線を感じとり、自分の日本人に対する愛との板挟みになって一言も言えない苦衷(くちゅう)に立たされた」ということであった。また、「アルマ・グレーブスは戦時下の日本で宮城遥拝(ようはい)を拒んでいたために、宣教団は彼女の身の安全を考えて、小倉の西南女学院から福岡の西南学院に転任させたことも伝えられている。他の国に転任した宣教師も多くおられたが、社会・時代状況にどのような変転が生じても、宣教師たちは日本人同労者

たちと精一杯福音宣教の使命に応えていた」と記されています。(『連盟 50 年史』松倉氏記述の要約。参考資料として、第 11 章の最後に付記された脚注、および 596 頁以下の「日本バプテスト連盟年表」等)

（3）教会教育関係の宣教師との協働（第二次世界大戦以降）

1946 年 10 月 29 日、E. B. ドージャー氏が南部バプテスト連盟の使節として再来日され、西南女学院、西南学院との協力関係の復興や日本バプテスト連盟の設立（1947 年 4 月 3 日）に向かって奔走されるとともに、戦前におられた A. グレーブス、W. M. ギャロット宣教師たちの帰任等に尽力されました。また 1947 年代には、主として九州各地で、牧師、信徒と新たにアメリカ南部バプテストから派遣されてきた宣教師たちとの協働による開拓伝道がなされました。

1947 年に、連盟は E. B. ドージャー氏の未来図により 4 年間に 60 名の宣教師派遣を要請し、外国伝道局は 100 名の派遣を構想しました（『連盟 50 年史』409 頁)。このような動向の中で、私が親しく接する機会を与えられた一人の女性宣教師、ドロセア・レインさんのことを紹介します。

同師は 1948 年、ケンタッキー州マーレー州立大学在学中に「主イエスがわたしを必要としている所には、わたしはどこへでも行く」と決心していました。1951 年、テキサス州のサウスウェスタン・バプテスト神学校を卒業する時に、レインさんは日本ではクリスチャンが極めて少ないことを聞きました。1951 年 4 月、100 人（前記）中の 76 番目の宣教師として、2 週間の船旅（「わたしは船できました」を合言葉のようにして自己紹介をした宣教師世代の中のひとり）で日本に着き、都心から離れた世田谷区瀬田にある小さな宣教師館に住みました。そこで 2 年間、日本語の研修に集中した後、1949 年から小倉に行き、西南女学院の高校と短大で英語科の教師として 10 年間勤めました。当時、レインさんは日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会員になり、バイブルクラスや英会話等で熱心に奉仕しておられました。

レインさんは 1962 年 4 月、東京都渋谷区に設置された日本バプテスト宣教団事務所に転任。新しく来日された宣教師に対応する責務を負い、親身になって一人一人に対応したことは多くの宣教師たちに知られています。

一時、定期休暇で帰国されたレインさんは 1962 年に日本に戻り、10 月から、板橋区前野町で開拓伝道をしていた志村バプテスト教会の宣教師となりました。ご母堂の病のために一時帰国されましたが、通算で 25 年間、バイブルクラス、英会話教室、教会学校クラスの担当（特に嬰児科クラスでの奉仕)、礼拝説教の分担等で、1992 年 1 月に退任するまで通算 25 年間の長期にわたって協力されました。(D. レインさんの資料に関しては、2013 年 8 月 11 日にケンタッキー州ホプキンスビルの斎場でなされた告別式の式辞「ドティ・レイン 1924～2013 年の歩み」で紹介された内容に、岡村による調査資料等が付加されたもの)

（4）E. B. ドージャー氏など、帰日された宣教師と連盟諸教会との協働による伝道の進展と各会（日本バプテスト婦人部、青年部、少年少女会）や出版・メディア（ヨルダン社）等の胎動

1940 年代後半から 50 年代にかけて、E. B. ドージャー氏は、連盟に加盟した各地の教会で特別伝道集会の説教者として奉仕されました。また、再帰任する宣教師や新しく赴任してくる宣教師を得、さらには外国伝道局からのゲストも迎えて、各地で特別伝道集会が開催されました。

1953 年の年次総会で「全日本にキリストの光を」とのビジョンが掲げられ、宣教団との協力によって、全国の県庁所在地に開拓伝道をする構想が打ち出されました。さらに、新任の宣教師が多く加えられる中で、拠点教会からその周辺地域へと、開拓伝道、教会復興、教会員訓練の充実のために多くの宣教師たちの地道な働きが進められていきました。レインさんの働きもそのような一例を証ししていると言えましょう。

連盟は、外国伝道局から派遣される多くの宣教師やその財政的支援によって教勢の進展を見るにつれて、信徒の活動や組織化が見られるようになりました。

1953 年４月には、日本バプテスト連盟婦人部が発足。少年少女の集いや青年の集い等が開催され、「少年少女会」と「青年部」組織の先駆けとなる動向も見られるようになりました。

E. B. ドージャー氏は、教会における信徒の教育訓練や教会形成に資するメディア、伝道、教育の媒体を連盟の活動に組み込む必要を示されました。そして、先に発足したヨルダン社（1947 年発足）での出版を計画し、一端帰国して、国外伝道局関係者と協議。宣教団の会計，連盟の副主事、恵泉教会（目黒区）の開拓伝道の責務を負う立場から、その事務所を目黒区下馬にあった石鹸工場を改装して設け、ヨルダン社における文書伝道事業に着手しました。1948 年には、今日の『バプテスト誌』の前身となる「バプテスト」を発刊するとともに、『バプテストの手引』や青年訓練会の『バプテスト教案』等を発行するようになりました。

1951 年５月、宣教団は連盟と共に全国的な福音宣教の使命遂行を期して、渋谷区神山町に事務所を移しました。E. B. ドージャー氏はヨルダン社社長を兼務し、坂本 嘉親氏（元常盤台教会執事・CS 校長、大宮バプテスト教会初代牧師）がその編集長として、児玉 振作氏（赤塚バプテスト教会名誉牧師）が会計としてして任に当られました。岡村正二は、1954 年１月から連盟教会学校部職員となるために、1953 年９月より編集業務見習いとしてヨルダン社に入社しました。（参照：主として『連盟 50 年史』408～411 頁）

（５）教会教育の担い手～「裏庭」でつながった出会い

連盟結成翌年の 1948 年４月、私は早大に入学し、板橋区常盤台にある親戚の隣家に間借りする生活を始めました。その家の裏に、生垣越しに広い庭付きの家があり、松村秀一牧師ご一家がそこに、首都圏の開拓伝道の一環として転入居して来られました。「牧師」という職に就いておられる人に初めて出会いました。生垣越しにしばしば挨拶を交わし、お誘いをいただきましたが、伺いませんでした。早大での「女性解放サークル（婦人問題研究会）」の活動やアルバイトに忙しくしていたからです。私の生家は新潟県十日町市郊外の豪雪地帯の山村で、織物工場を家業とし、戦時下で男性工員はただ一人。他は 50 人ほどの女性工員で、奥地の村落から集められていました。山間の小さな村落で、冬季はほとんど仕事が出来なくなります。そのため、父親たちがやって来ては娘に支給される賃金の前払

いを求め、そのお金が飲み代になっていました。そんななか、私の両親と彼らが厳しいやりとりをし、そのことで涙する女性工員たちの姿を見て、なぜこのようなことが親子の中で起こるのかと思い、子どもながら小さな胸に痛みを抱えました。

小学校の６年を終えた後、県立の十日町中学校（旧制）を５年で卒業し、早大（旧制）に入学しました。旧制の早大専門部１年から新制大学１年に移行して行く中で、私は女性解放運動にコミットしていました。私がこうして大学に入学したこともクリスチャンになったことも、村では初めての出来事でした。

1949 年 12 月４日、常盤台教会では最初の主日礼拝がささげられ、12 月 25 日に最初のクリスマス礼拝がささげられました。多分、第一週の週末であったと思いますが、クリスマスに備えての夕食会と祈り会が準備され、裏庭の家に間借りしていた私を最初の求道者の一人として覚えてくださって、日に三度も壮年の方がお出でになってお誘いをいただきました。

私は進まない思いでしたが、玄関横の三畳一間（おそらく、当時では「女中部屋」とされていた）から重い腰をあげて、出かけました。

集まっておられた方々は 12、３名でしたが、証しを聞いていたら、広島の原爆投下にさらされ、中高生になった孫娘二人と一緒にこられた方、また戦時下に夫に先立たれ、青年の息子さんとお出でになった方、他に社会人として活躍しておられる中年ご夫妻の方々等でした。集まった方々に共通していたことは、戦時下にあっても信仰を貫き通されたということでした。食事の前にみんなで讃美歌を歌い、短い奨励をお聞きした後で、数名の方々が祈られました。

私はその時初めてキリスト者の祈りを聞き、衝撃を受けました。その謙虚さ、罪・弱さの告白、イエスの十字架の愛に感謝する祈りを聞き、「日本の女性解放の実現はわれらの双肩にかかっている」と肩で風を切るように意気込んでいた自らの心のうちに潜む「自己満足、傲慢さ」に気づかされて、祈る人々の謙虚さと真実性に心を打たれました。そのような人々に出会い、生き方に触れて、1949 年 12 月 25 日、常盤台教会の最初のクリスマス礼拝に出席。以後、バイブルクラスや主日礼拝に出席して求道生活を始め、イエスを主と信じて 1950 年 11 月 26 日、バプテスマを受けました。

私はその翌週から教会学校新来者クラスを担当したのですが、40、50 名の子どもたちや保護者が来て会堂内には入れず、クラスは中庭で持ちました。新米教師の私は大学ノートに書いた言葉を丸暗記しながら奉仕をつとめましたが、他の教師の熱心さと、教会に通ってくる子どもたちとの出会いに心を動かされ、教会学校の奉仕をライフワークとして示されました。大学卒業後、内定していた会社への就職を断り、「主に従う道はここにあり」とヨルダン社に入社しました。

（６）成人科テキスト『聖書教育』の発刊

1950 年より、ヨルダン社はアメリカ南部バプテスト日曜学校局作成の教案を翻訳し、『聖書教育国際教案』として発行していましたが、「今日は独立記念日です」などの言葉もそのまま載せられていたことがありました。私は、松村（旧姓・遠藤）あき子さんがアメリカ留学から帰国後しばらくヨルダン社で翻訳を担当しておられた頃、学生アルバイトとして「幼稚科」の翻案をさせていただき、大き

な関心と興味を与えられました。

1952 年、青年部主事に松村あき子さんが就任し、監修に当たるようになってから、次第に日本の教会の状況に適合するように翻案は改善され、企画・編集体制が整えられて、教案はヨルダン社から連盟教会学校部に移されました。1953 年 1 月、戦後日本ではじめての教会学校成人科テキスト『聖書教育』(高校〜成人科) が季刊で発行されました。日本バプテスト連盟の教会学校活動は『聖書教育』を用いて、その具体的な形態をアメリカ南部バプテストの全年齢層にわたる日曜学校に、またその理念を幅広く日本の教会学校運動の再興の過程に学んで、子ども中心の日曜学校から、教会の本質的な働きであり、教会の教育的使命を担う全教会の教会学校運動として展開して行く啓発的な役割を果たしていたと言えるでしょう。

（7）平常伝道の場としての教会学校

連盟を構成していた教会、伝道所では、「教会学校の中心的な働きは、組織化された小グループによる聖書の共同学習と平常伝道、牧会」でありました。日本において他のプロテスタント諸教派が成人教育＝信徒教育というとらえ方をしているのに対して、バプテスト諸教会が教会学校成人科を平常伝道という観点からとらえようとしてきたことは特長のある点だといえます。教会学校が平常伝道を基本的な機能としてきたのには、三つの課題がありました。

①クラス組織というグループシステムによる求道者の定着化。②全信徒によって担われる教会形成（聖書の共同学習、伝道、牧会のわざを担うことで、信徒の働きが強化されていく)。③世にある教会の形成（世のただ中に生きている信徒が自分の日常生活の状況を疎外しないで聖書に取り組むとき、聖書は現代の人々に生きて働く神の御言葉（みことば）として力をあらわにする)。

「教会学校が平常伝道ということにおいてたえず外に向かって働き続けるとき、教会もまた、この世に希望を指し示す場でありつづけるであろう。・・・われわれは教会学校のクラスを、顔なじみの教会員同士の自己満足の場とならせない」「教会学校の基本的な機能を聖書研究と平常伝道にあるとして、もっと積極的に取り組んでいかなければならないが、それが世俗主義的な世への明白な挑戦であると同時に、世の人々の苦悩を責任をもって担っていく姿勢において貫かれなければならないことを確認すべきである」という認識は次第に広がっていきました。

（8）「自覚度」をあげる―信徒の使徒性について

連盟関係の諸教会、伝道所が直面している課題と展望について、以下のような課題があることを示されています。

①残念なことですが、教会学校の歴史を知らない人たちが増えているのではないでしょうか。このことは、全国的な規模や地方連合レベルでの研修会、各個教会での研修会等があまりなされないこと、また講師や発題者等の人材不足が生じていることなどにも一因があるように考えられます。

②特に、牧師は、「実践神学」の重要な課題の一環としての「教会学校を通しての伝道と教会形成のあり方」をよく学ぶ必要があると言えるでしょう。このことは、神学校における学習内容とも関係して

きます。牧師も信徒も共に使徒性を豊かに自覚して、教会内外で主の働き人となるように務めていくことを重視する必要があります。

③世代をこえて宣教の課題が広がり、多様化している時代の中で、一牧師・一教会の形態を続けることによって教会の働きが限界づけられ、矮小化されてはならないと思います。牧師、専門主事職等の複数化による共同（協働）牧会の導入（ボランティア・スタッフを含むとしても）による成熟したティーム・リーダーの奉仕を作り出すことです。(参照：エフェソ　4：11～16)

④「信徒は教会の凍結された資産ではなく、伝道の第一線に立っているのは信徒である」(ヘンドリック・クレーマー『信徒の神学』37 頁。参照：同書 第1章、ペトロ一 2：9、コリント一 12 章、エフェソ 4：11～16 等）ということを学び直すことが重要なのではないでしょうか。時代を生きる神の民としての信徒の使徒性（「使徒」には「派遣された者」との意味がある）を見直し、「召され集められて生きる教会、遣わされ散らされて生きる教会」としての教会形成に取り組む必要があります。全年齢層に及ぶ教会学校も、そのような教会の使命に応える働きの場です（参照：『バプテスト誌』2006 年 6 月号特集)。

（9）宣教師（宣教団)）と連盟諸教会との協働による教会教育、教会形成

①教会教育（教会学校、信徒訓練、出版、教会音楽）の分野における宣教師（宣教団）との協働については既に本文の中で触れましたが、『連盟 50 年史』552 頁以下の「事務所役職職員」(1947～1994 度) の内、「教会教育」分野に限定して紹介します。ここに記載された宣教師の方々との協働なしには、日本バプテスト連盟の諸教会、伝道所における教会教育面の今日の状況は考えられません。(主事職限定) E. L. ハロウエー（教会学校）1959 年～、J. クーパー（教会音楽）1966 年～、V. ハイフィル（少年少女）1965 年～、M. J. ライト（訓練会）1966 年～、B. C. ラブレス（教会音楽）1972 年～。以上の方々は、それぞれの所属教会でも宣教師として、主からの召しと賜物に応じて忠実な奉仕を続けられました。

連盟教会学校部主事としての岡村と密接に関わって下さった E. L. ハロウエーさんは 1949 年に来日され、同年 12 月から常盤台教会の開拓期に、1951 年から 5 年間は名古屋教会の開拓期に協力し、特に聖歌隊、バイブルクラス、教会学校活動に参与されました。1953～1965 年まで、連盟・教会学校部委員、同教会学校部協力主事を歴任されました。1959 年には教会学校関係の最初の単行本として、アメリカ南部バプテスト日曜学校局から出版された *Building Up a Standard Sunday School* を原本とし、聖書教育編集室編『教会学校の形成』(E. L. ハロウエー、岡村正二翻案）が発行され、各個教会や各地での研修会で用いられました。ハロウイさんは常盤台教会、名古屋教会、大久保教会の開拓期に協力しながら、17 年間、連盟における「全年齢層の教会学校を通しての教会形成」に心を尽して労してくださった宣教師でした。

また、M. J. ライトさんは 1950 年に来日され、常盤台教会が母教会となって始まった浦和教会の開拓伝道に協力されました。浦和市内の埼玉会館のホール（2,000～3,000 人も収容可能）でアメリカからゲストを迎えて特別大伝道集会が開催されたとき、常盤台教会は聖歌隊を派遣しました。私は学

生でしたので週間日に浦和に行き、ライトさんの車に同乗して市内を回り、スピーカーで特別伝道集会の案内をしました。ライトさんは浦和の開拓伝道に協力しながら、1965 年に連盟の視聴覚担当主事としての、また 1968 年には訓練部の主事としての責務を負われるようになりました。さらには、1965 年から 66 年にかけて、アメリカ南部バプテスト外国伝道局の提案により、日本、韓国、台湾、フィリピン、香港、タイ、ベトナム、マレーシア、パキスタンの９ヵ国が参加して「アジア・プテスト教会学校強化運動」が実施されましたが、ライトさんと私は共に実行委員として、香港での企画会議（1964 年９月）に参画しました。

その頃、日本では既に 1947 年から 1948 年にかけて「全年齢層の教会学校」が形成されていたので、強化運動に参加する諸国の教会に日本の状況を証しし、アピールしてほしいと要請されました。その結果として、1964 年９月に香港、台湾、沖縄へ、1965 年３月にはフィリピンのミンダナオ島、ルソン島へ、そして 1966 年２月には韓国へ行き、大田の教会で全国指導者研修会に参画しました。300 人余の集会でしたが、会堂の正面に「歓迎！ 岡村正二牧師」と横断幕のように掲げられていたのを見て、私は「絶句」してしまいました。責任者に促され、やっと戦責告白をして、講演をさせていただきました。終わって礼拝堂の入り口に立った私に、手の平が痛くなるほどに一人一人の方々が握手をして、好意を表して下さいました。他の国々においても、全く同様でした。

1968 年 12 月、志村教会では重量鉄骨で３階建ての学生会館を建立しましたが、その目的は、海外からの留学生と地方から東京の大学に入学してくる学生たちが交流し、隣接する教会堂で礼拝にも出席することでした。そのようにして、皆が和解の絆で結び合わされ、平和な明日に向かう人材となるように意図されたものでした。それは、戦責告白を具体的に表明する一つの現れでもありました。しかし残念ながら、一室二人同居を厭（いと）うような学生たちのライフスタイルの変化や管理人夫妻の困難な発病等によって維持が難しくなるとともに、礼拝・教会学校出席者の増加も相まって、1977 年に「教育館」に使途変更となりました。さらには、大型台風の影響によって漏水、外壁落下が生じ、2014 年５月、解体せざるを得なくなりました。今は空地になっていますが、当初の主旨、経緯から示されたことを覚え、目下、新たな活用を検討しています。

（10）少子、高齢化社会と教会学校の課題

①日本バプテスト連盟から毎年発行される「教勢報告書」によれば、信徒活動（各会）は、付属幼稚園のある教会は別として、礼拝出席者が 100 名前後を超える教会であっても、小羊会、少年少女会はほとんど２、３人一桁となっています。教会学校も同様で、嬰・幼稚科と小学科の出席者数はほとんど 10 名以下に留まっています。青年会も同様です。また、礼拝出席者、教会学校出席者は中高年代以上の人が多く、70 歳以上の出席者が多くを占めている教会が増えていると推測されます。しかし、そのような状況にあるとしても、与えられた掛け替えのない生涯を主の体である教会につらなって神の家族として歩み抜くことは、主なる神の恵みの賜物として祝福されて余りある生き方であると思います。

加藤 常昭氏（元・教団鎌倉雪ノ下教会牧師）は隠退牧師になり、諸教会の要請に応えて、伝道、牧

会、教会形成の支援をしておられましたが、ある研修会の席上でのことを記しておられました。東京の教会から参加された若手の牧師が、「先生、私のところの教会学校出席者は年平均一名、教師三名です。ずっとそのまま続いています」と言ったというのです。それに対して、「ずっとそのまま続いているのですか。来ないなら、こちらから訪ねて行ったらどうですか」と、加藤氏はアドバイスされたといいます。そして、それを受け容れて実行したら、「祖父母が孫を連れてくる動向が見られるようになり、出席者が増し加えられた」と紹介しておられました。（加藤常昭『これからの日本の教会の伝道』日本キリスト教団出版局、2004 年、22〜24 頁）肝に銘じておきたいことです。

このような課題を巡って、諸教会の取り組みを種々知らされています。

志村教会でも、主日礼拝の中で説教の前に「子ども説教」を牧師、信徒が５分程で語っていましたが、今は説教が始まる時から別室に移動し、「子ども教会学校」を教会員がローテーションを組んで行なっています。子ども向きのプログラムを持ち、礼拝の終りの部分（頌栄、祝祷、平和の挨拶）に戻って合流しています。その他、子どもたちを中心にした特別行事として、夏休みの初期に“JOY JOY 夏の子ども会”が行なわれ、11 月の第三主日礼拝の中で「子ども祝福式」が守られています。

②教会堂での主日礼拝に直接出席できない年長者（高齢者）との関わりについてはどうでしょうか。今日、どこの教会でも施設に入居したり、体調の問題や教会との距離的な問題があって、主日礼拝に直接出席できない年長者の方々がおられると思います。志村教会ではこのような事情がある人達も成人科のいずれかのクラスに所属しており、牧会面で分担するように努めています。

しかし、施設に入居する場合でも病院に入院する場合でも必ず、身内関係者が保証人として手続きに関わる必要が生じます。当該者が家族と生活を共にしている場合は問題になりませんが、身内の方が遠隔地に居住していたり、当該者の家族にクリスチャンがいない場合に事がスムースに運ばれるよう、当該者の家族とも日頃できるだけ接点をもてるように備えておくことが大切です。

教会には入会申込書が原籍簿として保存されるはずですが、何かの変化が生じた場合には、修正・加筆する必要があります。天に召される時もきます。その時の要望を別紙に書いて添付しておくことも望ましいことです。

いずれにせよ、大切なことは、主の導きの許に「時が満ちる日」まで神の家族の一員として交わりの絆を豊かに保ち続けていくことです。志村教会ではみんなに配付される週報や諸文書を定期的に送ったり、牧師や有志で問安するように努めていますが、文書を読むことが難しくなった人たちには、教会の庭の花壇に咲く草花の写真葉書に聖句を添えて送ったりしています。大きな助けになるのは使いやすい携帯電話です。施設に入居した場合に携帯電話で生のコミュニケーションを保つことが出来るように、使い方を身につけておきたいものです。

以上、不十分な証し、エッセイですが、最後に御言葉を書き添えます。私の微意をお受けいただけましたら、幸いに存じます。

「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱(しか)っ

た。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない』」

（ルカによる福音書 18 章 15〜17 節）

「万軍の主はこう言われる。
エルサレムの広場には
再び、老爺（ろうや）、老婆（ろうば）が坐すようになる
それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。
都の広場はわらべとおとめに溢（あふ）れ
彼らは広場で笑いさざめく」

（ゼカリヤ書 8章4〜5節）

【付記】

今回、時間的、体調的な限界から、重要な下記２項目について言及できなかったことをご容赦ください。

1. 教会学校の目的「教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、生の全領域において主を証する生活を確立していくことにある」（1971 年、連盟年次総会で決定。参照：聖書教育編集室編『教会学校ハンドブック』1998 年、第二章）

（改訂）「教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰生活に導かれ、教会を形づくり、生の全領域において主に聴き、主を証する生活を確立していくことにある」（1999 年改定。参照『聖書教育』各期号の「今号の見通し」欄等）

2. 宣教師（宣教団）との協力関係の推移については、『日本バプテスト連盟五十年史』「第７章 対外協力」「第８章 連盟機構、事務所、財務、人事」（302〜347 頁）等をご検討ください。1970 年代以降、「自立と協力」という視点から、連盟と宣教団は次第にそれぞれ自主独立的な宣教活動に移行してきましたが、今回、私は両者の協働を重視して、その実際を記しました。最近、日本バプテスト宣教団には、教会からの要請により、宣教師を派遣して協力する動向が見受けられます。そのような道をぜひ拓いていただきたいと願っています。